

ある小学校教員の高度成長期体験（2）

——「青木祥子日記」（1961-1965）を読む——

吉 見 義 明

目 次

はじめに

- I. 小学校教員としての経験
 - II. 教員組合運動と政治的立場
 - III. 経済生活の安定
 - IV. 女性としての新しい生き方の模索
- おわりに

はじめに

普通の人びとにとって高度成長とは何だったのだろうか。また、高度成長期の体験はどのような意味を持つのだろうか。このような関心から、筆者は「ある小学校教員の高度成長期体験——「青木祥子日記」（1960年）を読む」を公表した（本誌61巻1・2号，2019年9月）。本稿はその続編であり，1961年から1965年までの青木祥子（仮名）の軌跡を明らかにしたい¹⁾。これは、高度成長期に正規雇用で定年まで働いていた自立した女性の経験の特徴の一面を明らかにすることになるだろう。なお、青木は1923（大正12）年4月生まれであり，1961年4月には38歳だった。

1) 本文中、引用文は原文のままとしたが、人名は一部を記号に変更した。また、旧漢字は新漢字にあらためた。〔 〕は筆者による註である。

I. 小学校教員としての経験

浦和市内の小学校で教えていた青木祥子は、教員になってから9年たっており、教育に関して自信を持てるようになっていた。1960年度は1年生の担任だった。1961年1月19日には校内の社会科研究会を主導し、「何とか自分でもできる自信がでた。うれしい」と記している。3月には卒業式の飾りを玄関につけ、校長・教頭にも褒められている。

新年度（1961年度）には社会科をぬけ、図工の主任になり、2年生の担任になった。この年の勤務校での仕事ぶりは、つぎのような記述からもうかがえる。

今日はとても忙しいー。1. 朝から子供銀行のおかねあつめ。2. 映写会（フィルム担当）—マアちゃんたすけてくれたが、よくうつらすがっかり。3. 図工の美術展へのしんさ。（中略）4. 県南ブロック母親と教師の会のビラ発送。5. あしたのえんそくの付添いであけるのでその用い。

忙しいことだった。頭がいたくなりそう。何しろ、図画のシンサは何点も出してくれたし、おまけに名前がないのや、クラス名のないのなどあって、ほねがおれた。（10/30）

多忙な勤務実態や、彼女がとくに図工に力を入れている様子がわかる。とはいえ、すべてうまくいっているわけではなかった。ある日の社会科校内研究では、「祥さんの組はワアワアしてて、しょうがない」と批判されている（12/7）。それでも、年度末には、受持ちのクラスが学芸会で「赤ずきん」を演じたが、「これだけやれるようになったのだからたいしたもの、えらいもの」と感心するなど自信を深めていた（1962/2/14）。

しかし、父母の教育に関する要望はきつく、1962年度には、持ち上がりの3年生の教育相談会で「きちんきちんと連絡簿かいてしゅくだいをやらせてきたのに3年になって野放しになってきてしまったというような感想もあり、もっときびしくしてほしいといわれた」と記している(5/23)。また、社会科の授業でも、反省するところがあった。

地図をかいて子どもに説明させればよかった。そうすればどこ迄わかっていてのかたしかめられるから……。みんな深切^{ママ}すぎて先生がやっちゃって、どうもいつもの私のわるいくせで待つということ、子どもからひきだすということが欠けていてまずい。一応、Kさんには大分研究していい授業だったとほめて頂いたが、もう一段の研究を要する。(6/19。下線は原文のまま)

子どもから引き出すということ、いいかえれば主体性をはぐくむということが欠けていてまずい、と感じているのだ。他方で、職場はどんどん忙しくなった。

5じかんめの体育きつい。ひる休み、放送、給食指導、社会科部会と、ヒステリーになりそうに忙しい。ひるの休みなどありゃしない。午後4時半迄職員会ギ、疲れた。(5/28)

また、この年には職員旅行の不参加者が3分の1に増えるなど(6/18)、従来のような親睦を嫌う傾向が教員の中に生じるようになっていた。

1963年になると、教員の間で意見の対立が目立つようになった。たとえば、学芸会をやめるかどうかの議論では、職員会議で「とうとう私の提案がとおり、学芸会をするかしないか、再けんとうに持ってゆき、6年4人

する、5年以下しないで、4:12でしないことになり、新年早々うれしい成果あがる」と記している(1/9)。

すでにのべたように、青木は図工と国語の指導で自信を持っており、1月には受持ちのクラスの児童が絵画で県展特選となり、3月には作文で表彰される児童がでてよるこんでいる。しかし、これらに対して「賞品かせぎ」といわれ、「耳がいたかった」とも記している(3/26)。

また、新年度(1963年度、4年担任)に担任の児童がトラックにはねられ、重傷を負うという事故がおきたが、これに対し校長から「ふだんのかんとく、注意がたりない」と叱責され、ショックを受けている。

きょうはつくづく教師というものの責任のおもいことかんじさせられ、いやになった。これで私がソ連に行っていたらどうだったでしょう。やっぱり行かなくてよかった。行かなくなつて、こうして、交通事故でもおこれば、担任のふだんが、というのをいわれたのではやりきれない。(7/18)

ソ連にいったらというのは、彼女がこの年ソ連旅行に行く計画をたて、校長の許可をえていたことである。

図工の指導に関しては、1964年になっても、1月に受持ちのクラスから県美術展で3人が特選となり、2月には秀作美術展で4名が入選し、面目をほどこしている。新年度(1964年度)には3年の担任となったが、7月には受持ちの児童の詩が朝日新聞に載り、「うれしい」と記している(7/10)。9月には県の図工審査委員を委嘱されている。

1965年4月には、不本意ながら2年を担任することになるが、まもなく学級内で盗難事件が起き、校長から「おまえの学級けいはいはゼロだ、なっていない」と非難され、同僚教員の一人からも「先生なんかやめちゃい

な」と毒つかれるなど、対立が生じている (4/23)。その原因の一つは彼女の教員組合運動にあったようだ。

すでに1963年に青木がソ連旅行を計画したことはのべたが、彼女が県教組の仲間にソ連行きのことを相談したら、「すてきだなあ、ぜひ行ってきたい。ショウさんが行くなら、洋服位おせんべつにあげる。上尾中でも半年休んでアメリカへ行った人の例もあるから、直接教育長とあって話したらいい」といわれるなど好意的だった (2/21)。しかし、小学校の同僚の反応は別だった。5月17日の朝の職員集会でソ連行きのことを打ち明けたら、つぎのような反応がかえってきた。

Tさんからはどういう目的で、Mさんからは、どのようにそのあとをうめるつもりかという質もんが出たが、「いってらっしゃい」といってくれた人はなし。一寸寂しかった。(5/17)

幸か不幸か、この旅行計画は申込者が少なく中止となったが、同僚には歓迎されていなかったのだ。また、1965年に中国旅行に行くことを告げた時には、同僚から「何で共産圏ばかり行きたがるんでしょうね。中国なんかちっともいってみたいと思わない」といわれている (6/26)。対立はかなり深刻であった。

II. 教員組合運動と政治的立場

青木は日本教職員組合 (日教組) 埼玉県教職員組合に属し、日本社会党を支持していた。1961年早々には、組合婦人部委員会の婦人役員の選考が難航し、つらい思いをしていた。そこで、彼女は役員を引き受ける決心をした。

〔婦人部〕 Bグループでも熱心にあつまってくれ、書記局員も、 Sさん以下顔をそろえてくれて、 ていちょうだった。みな、私の決心をほめてくれて、 げきれいして下さった。私も自分の過去をはなし、 けっこんに失敗して止むなく一人であるということも、 婦人部がつぶれそうになったときやっぱりここでつぶしてしまっはいつ芽が出てくるかわからない（中略）といったことを話しあったこと、 また各グループからだそうと自分たちできめたことを自分たちでまもれないようではいけないと思うことなどいい、 さいごに羽仁〔もと子〕先生のお墓におまいりしたとき、「力が出るもの出せるもの」といわれた言葉をあらためてひしひしとかんじたというような感想をいってみなさんのおうえんをおねがいをした。(3/17)

教員組合の婦人部運動をつぶしてはならないという思いと自由学園の羽仁もと子の教えを守りたいという思いが重なって、 婦人部役員を引き受けると決心していることがわかる。29日には埼玉県教組本部に行き「何ともいえない空気だ」と感じたが、 執行委員（北足立郡常任委員、 副部長）を引き受けた。

それでも、 生来のあわてんぼうで、 4月25日のILO 統一行動日には、 うっかり遠足の予定を入れてしまい、 組合からつるし上げを受けるという失態を犯したりした。この年の統一メーデーは、 前年のような安保改定反対という激しいものでなく、「リクレーションもかねている連中もあった」というように変化していた。5月9日には婦人部長となり、「愈々今日から私の婦人部本来の仕事、 忙しくなる」と覚悟した。

6月10日の埼玉県教組婦人部第14回大会では議長をつとめた。「高田なほ子さん、 奥山笑子さんなど、 日教組の婦人部の方のおはなしすばらしく、 大へんいろいろ有益だった」と記している。17日から宮崎で開かれた

日教組婦人部定期大会にも派遣された。

以後、教科書問題での一斉職場集会、小児麻痺ワクチン接種、保育園・高校増設、父母負担軽減、平和な社会建設をもとめる浦和・与野地区母親大会開催、校長との協定書取り交わし、学力テスト拒否の運動、浦和市教育委員会との交渉などに取り組んでいる。

この間、婦人部委員会で叱られたりして、つらい思いをしたという。10月24日の市教育委員会交渉では「婦人部長はたいへんだと涙がこぼれる思い」をし、11月2日には「組合活動のために個人の生活が侵害される」と感じている。28日には、県教組人事対策委員会（人対）の委員になったが、「Hさん、Mさんたち、人対の苦勞少しでも肌でしりあえたのだ。私よりもっともっとならぬ人のことを考えよう。それでないとあんまりバカバカしくなるから……」（12/5）、「本当に事務局辛い」（12/7）と記しているように、これは苦勞の多いものだった（人対というのは、人事異動などの交渉をする部門）。

1962年2月には「あしたの人対へもってゆくためのIブロックの人事異動希望の調書（秘）を35枚刷った。（中略）教育長交渉11時40分に終る。やれやれ」と記されている（2/16）。

次期の婦人部委員候補者の選考では、各学校から一人か二人出すのだが、「7人中6人、やはり独身の人になってしまった」（3/2）とあるように、未婚・独身の教員に負担がかかるようになっていた。このような現状に青木は「疲れた。一人で骨を折るのバカバカしくなった」と感じている（3/13）。

1963年になると、教員組合関係の記述は減ってくる。母親大会関係で、市大会で司会、県大会で助言者となることになり、「えらいことだ」と記されている（7/15）くらいである。

1964年には、婦人部委員会や県母親大会に出席し特別報告するほかに、

婦人少年室主催婦人会議に出席したり (4/7), 新婦人の会に参加したり (6/7), 凶工の研修会実施委員会に出席したり (6/19), 文部省教研に参加したりしている (7/21)。他方で, 4.17ストが中止になった時にはほっとしている。

他の政治問題に対する態度はどうだったのだろうか。1961年4月にソ連の政治体制への批判をふくむパステルナーク『ドクトル・ジバゴ』(時事通信社, 1959年)を読んでいるが, 感想は書かれていない。同じころにガガーリンの宇宙旅行の成功が報じられたが, これを「大成功」と記している (4/12), ソ連の印象はよかったと思われる。

9月にソ連が水爆実験を開始し, アメリカも再開した時は, 死の灰の恐怖を感じている (9/5)。10月には, 雨の中に放射能が多いため, 小学校では雨中の屋外での体育が中止になった。このような中で, 交際していた原子力関係の会社の技術者から「ソ連の実験に対して何故日教組は抗ぎしないのか」と問い詰められている (9/6。それに対する返答は書かれていない)。

すでにみたように, 1963年には日ソ協会が企画したソ連旅行(第2次婦人視察団)に応募して, 校長の許可を受けている。また, ソ連映画「鋼鉄はいかにきたえられたか」を見て, 「革命はたいへんなことだと深い感動」を覚えている (7/22), ソ連に対する憧れはあっても, 批判的な姿勢はなかったものと思われる。

他方で, アメリカの中産階級の生活に憧れているので, アメリカに対する批判的姿勢もなかった。それは, 1963年11月にケネディ大統領が暗殺された時に, 「びっくり, かなしくなった。私の尊けいしている方。ジャクリーヌ夫人のなげきいかばかりかと, 惜しまれる」(11/23)と記していることから確認される。それでも, 1965年に映画「ウェストサイド物語」(1961年製作)を見た時には, 「ニューヨーク繁栄の中にも, こうして恵まれない階層もあるのだなあと思った」と記されているように, アメリカの

厳しい格差社会の実態を知りはじめた (7/22)。

ベトナム戦争についてはどうだろうか。1962年11月にはベトナムとラオスに関するつぎのような記述がある。

印度支那半島, ベトナム→共産軍パテトラオ。〔ラオスが貧しいのは〕ラオスが第二の中共のようになることをおそれたアメリカがパテトラオの勢力をくいとめ, ラオスを反共のとりでとするため, 東西冷戦の谷間としてしまったからである。(11/14)

ラオスの貧しさの責任はアメリカにあるととらえられているようだ。1963年11月には南ベトナムのクーデタ (ゴ・ディン・ジエム政権の倒壊) の記述があるだけだ。1964年には記述はない。1965年8月には中国旅行をしているが, その関係からか同年にはつぎのような記述が現れる。

アメリカ, またベトナムをこえ広西省バクゲキのニュースをきき, その感そうと中国へいったときのこと, かいて, 朝日「声」に投書。(中略) のるかどうかわからないけれど, アメリカの中国封じこめ政策愈々ロコツ化する。(10/6)

彼女にあっては, ベトナム戦争は中国封じ込め政策の一環とのみとらえられていたことになる。中国に関しては, 受験戦争に明け暮れる頭でっかちの日本の少年少女と比較して, 公園や道路を清掃している中国の少年少女の明るい瞳に感動したという。ないものねだりではあるが, 中国に対する批判的姿勢もなかったということになる。

国内政治についてみると, 彼女は一貫して社会党支持だった。1963年4月の県議選では社会党の森勝治に投票した。11月の総選挙では共産党の平

田藤吉に投票したが（落選）、これは社会党の畑和は絶対当選すると思ったからだ（11/21）。1965年7月の参議院議員選挙では社会党の森勝治（地方区）と鈴木力（全国区）に投票した。この選挙では東京地方区で自民党が完敗したことを「大いによろし」と記している（7/6）。このように、一貫して社会党支持の態度をとっているが、共産党への期待もないわけではなかった。

Ⅲ．経済生活の安定

高度経済成長の持続とともに、青木の生活の経済的基盤はますます安定したものとなっていった。1961年1月分の俸給は手取りで1万9884円だった。2月分の給料（手取り）は2万2928円で、追給分（手取り）が1万8588円もあったので、この月は合計4万1516円にもなった。彼女は「毎月これ位頂けるといいな。さて、こんなに頂いたのでは何につかおうかしら」と記している（2/21）。

3月には5万円の電力債を買い、7月には商工中金利付債（7分3厘）を5万円申し込んだ。11月には定期預金をおろし、八幡製鉄株を買ったが、11月10日には「66円で買った八幡製鉄どどんあがり、70円になったので一寸ゴキゲン」と記している。さらに11月28日には、山一大型ファンド40口4万1200円を買っている。

1962年には「商工中金で1825円受けとり、だいぶお金持になってきてうれしい。」（2/3）という記述があり、12月末には八幡製鉄株を積み増し、2000株にしている。

1963年4月には本俸が3万4700円に上がり、手取りが初めて3万円以上となった。12月のボーナスは8万1576円（手取り7万3567円）となり、八幡製鉄株は4000株に増やすこととしている。

1964年1月には、貸付信託を三井信託に集中することにし、3月には三

井だけで計100万円になった。10月には153万円になり、200万をめざすことにした。また八幡製鉄の株は新株割当で、計4500株となった。

1965年になると「株価大幅に動き、面白くなる」という記述が現れる(1/6)。4月の月給は手取りで3万7841円となった。6月には八幡製鉄から3000の無償株を貰っている。6月には三井信託だけで200万円を突破した。9月には母をあずかることになり、80万円で家を増築することにした。11月には台所・テラスが改良され、風呂場もできた。こうして年末には「〔今年〕中国に行き、家もできて支払いも無事にすみ、感激の中に大晦日を過ごす」ことができた(12/31)。経済的にはとても安定した生活になっていることがわかる。

IV. 女性としての新しい生き方の模索

青木は、絵画・映画・演劇・音楽・カメラ・サイクリングなど多方面に関心があった。1961年には、映画「ベン・ハー」(テアトル東京)・「松川事件」(浦和東宝)・「良心」(チェコ映画)などを見ている。1月28日に北浦和で見た「名もなく貧しく美しく」では、夫婦の愛情の美しさに泣かされた、という。このほか、歌劇「ボッカチオ」(村山知義、イイノホール)・「項羽と劉邦」(産経ホール)・「インカ帝国黄金展」(松坂屋)・「相川睦子ピアノリサイタル」(山葉ホール)などを楽しんでいる。ダンス講習会や鎌倉への写生旅行にも参加している。

しかし、経済生活が安定し、楽しみがひろがっても、心の中に空漠たる気分が拡大していった。1961年の敗戦記念日には、自らの戦後16年をふりかえってつぎのように記している。

あの時まだ純情なかれんな娘であった私も、16年の間にけっこう、二人の子を生み、そして悲しい離婚をし、先生になり、秩父の家

で2年3ヶ月、大宮大成小にうつり、(中略)〔次いで浦和に移って〕今年で6年、家もどうやら自分の家というのをもてて、一応安定した生活に入り、老後の貯ちくにもはげみ、財産としてはいまちょっと130万円位もっているかな。(中略)そして、私も一個の女性として開眼し、まさに女ざかりを迎え、不自然な一人の生活を余儀なくされている。まあ、一人の方がいいことも沢山あるが、心も体も許し合える人が欲しい。(8/15)

彼女は高度成長期に永年雇用で働き続けることができる職位にあり、また安定した生活を築くことができた女性であったが、信頼できる伴侶や暖かい家庭の欠如のため深い寂しさを感じていたのだ。

1963年11月8日にシャガール展を見た時にも「どの絵にも幸せそうなカップルがかかれています、私は絵に対してジェラシーをかんじた」という。この感情は、同じ高度成長期に安定した主婦となった女性たちの心に広がっていく寂寥感²⁾とは異なるが、生活が安定しても、心が満たされないという点では共通するものもあっただろう。

彼女には親しい男友だちが何人かいた。いずれも結婚相手として望ましい人だったが、みなすでに結婚していた。

1961年には縁談があった。相手は官僚で、中3の女の子が一人おり、奥さんは亡くなって3年になるという男性だった。背が高く、柔道の有段者だったので、男らしい人でなければ、という彼女の希望に沿う人だったが、断ることにした。その理由はつぎのとおりだった。

2) 鹿野政直は、高度成長下の主婦の寂寥感を「企業戦士の「妻」としての性別役割」という新たな拘束もたらす「つらさ＝精神の酸欠状態の集積」ととらえている(『鹿野政直思想史論集』2巻〔岩波書店、2007年〕228ページ)。

今のままの方がいいから。先生もやめなければならぬし……。

(10/23)

〔日曜日なので朝の〕10じごろ迄思い切ってやすむ。体も疲れていて、やっぱりこうしてねていることができるのも、一人でいるおかげと、生活がけいざい力をもつとけっこんなんてアホらしくなる。やっぱり一人がいいわ。へんな亭主にペコペコするなら……と思っちゃう。(11/3)

周りにいる男友だちと比べるとこの男性に魅力がないということもあったが、仕事の継続と、生活の自由さということも大きかった。1963年に別の縁談があった時にはこう書いている。

いい方だったらおあいしてもいいと思うが、今更、けっこんしてうまくやっっていけるかしらと心配にもなる。毎日毎日のことがわずらわしくなりそう。たとえば毎朝ごはんをたく、おかずをつくるなども——。そして赤ちゃんでもできて、先生をしてと、やっっていく自信なし。そうした場合、彼の収入だけでやっっていけるものかどうか、そのへんもはっきりききたいし、もうこのままで、自分のすきなように人生を送った方がいいかしらんとも思って、面倒くさくなった。(9/17)

今回も相手に魅力が欠けることも気になって断っている。「いい方はいい方だけれど、何か欲しい。」というのだ(10/7)。

とはいえ、1962年4月には満40歳になったという焦燥感もあった。「女としてのいのちもあと数年と思えば侘びしい」(4/30)と思うのだった。

このような中で彼女は新しい女性の生き方を模索して悩み、悶え、ざわつく。1963年1月には壺井栄をかこむ座談会に参加し、「幸せとは、外か

らみたのではわからない、その人の心のもち方。一日一日を精一杯生きることができたら、それが幸せというものではないだろうか」という言葉を書き留めている (1/9)。

また、4月には石垣綾子『私の爪あと』(東都書房, 1960年)を読んでつぎのように感じている。

二人の子も失い、今孤独になっている人、自由学園第1回卒業生。羽仁さんもてこずらして、□□私に似ている所もある。この中〔自由学園卒業生の中〕で、やはりなやみもだえた一人。(4/6)

石垣と同じように、自由学園での教えを受け継ぎながら、悩み悶えている自分という認識が生まなましい。1964年2月23日には羽仁説子講演会に参加し、「人生とは独立の判断のちくせき」というサインをもらっている。3月1日にはある男性からお妾さんにならないかといわれているが、「お妾さんなんていやね。でも、女の人の幸せ、やはり子どもが欲しい」と記している。

4月22日には深夜から翌日3時まで瀬戸内晴美『女徳』(新潮社, 1963年)を読んだが、「これも一人だからこそできること、あまり結婚ということあこがれて考えなくなった」と記している。7月6日からは山岡莊八『徳川家康』(講談社, 1953年～)を読みはじめるが、これも一人で生きることと関係があるかもしれない。

そして、5月4日には、これまでの男友だちとの関係を大事にしながらも、「一人で寂しいけれど、また自由に生きて行こう」と決心する。仕事と、趣味(絵、旅行、カメラ、俳句)を続けながらである。それでも1965年には、恋愛や家庭がなく、学校勤務と母の世話だけでは寂しい、とも感じていた (11/4)。

おわりに

青木祥子は、高度成長期の日本で、小学校教員として能力を身につけ、自立し、図工指導・社会科指導・国語指導などで力を発揮していた。他方で、学校内での対立に直面するようになっていた。教員組合運動でも本気で尽力していたが、次第に疲労感と負担感を感じるようになった。それでも自由学園や羽仁もと子・羽仁説子との関係が深く、その教えを実践しようとした。政治的には、アメリカとソ連・中国へのあこがれ・期待が併存していた。また、ソ連核実験への批判的言動はみられなかった。ベトナム戦争については、中国封じ込め政策という視点でのみ批判的にみている。

経済的には相当に安定した状態となり、株価の動向にも敏感となっていた。また、海外旅行をめざす財力もついていった。テレビ・映画・演劇・美術展・サイクリング・旅行・写生・俳句など日常生活を楽しむ余裕も生まれていた。

他方で、愛する伴侶がいないという大きな欠落感を感じていた。そして、結婚にあこがれていたが、望むような結婚ができそうもないと実感するようになり、それとは異なる新しい生き方を模索しはじめた。「なやみもだえる」女と自認し、そこからの脱出策として、自分の好きなように生きるという、かなり自己中心的ではあるが、新しい女の生き方を模索するようになったのである。

このような生き方が、その後どのように展開するか、さらに検討することが今後の課題である。

付記：本稿は「女性の日記から学ぶ会」(代表、島利栄子氏)の2020年1月例会(日記塾第111回)で発表した「青木祥子日記を読む 1961-1963」に加筆したものである。日記の筆者と、日記の所蔵者である島代表と、ご批評をいただ

いた「女性の日記から学ぶ会」のみなさまに厚くお礼を申し上げたい。なお、本稿は日本学術振興会の科学研究費助成事業基盤研究（B）15H03243の研究
成果の一部である。